◆ちょう校長の「**おじゃましまーす！**」◆

【　第２回　令和元年 11 月 16 日（土）山田　紀代美さん（昭和 59 年卒業）　】

大学卒業後、博多の和菓子の老舗「石村萬盛堂」に就職、32 年間にわたって石村僣悟社長（現会長）の秘書を務められ、社長の交代をきっかけにこの４月に退社。茅乃舎や椒房庵で知られる「久原本家グループ本社」に転職された山田さん。私の自慢の教え子の一人であり、私が県教育庁に勤務していた時も、石村社長の随行をされる山田さんの姿を見かけていました。

いつかインタビューができればと思っていましたら、偶然にも 11 月 16 日（土）、西鉄柳川駅、11:05 発福岡天神行き特急に乗ろうとしてホームでバッタリ！車中での 50 分間、ＩＣレコーダを向けてお話を伺いました。電車の中でのインタビューという状況でしたが、あっという間の 50 分、まさに“学問の神様”のお引き合わせでしょうか！？

◆　◆　◆　◆　◆

後日、職場にお伺いしました

＜校長＞石村萬盛堂退社、久原本家グループ本社への就職の挨拶状を６月にいただき、さすがだなぁとびっくりしたんですよ。私が今、出汁や鍋のもとのお世話になっている久原本家グループ本社って糟屋郡久山町でしょ。私は隣町の粕屋町出身ですから、小さなころから久原本家グループの中心である久原醤油さんを身近なところで知っているんですよね。それがここまで事業を拡大されてきて、そこに山田さんが転職され、凄いなぁという気持ちとお祝いの気持ちをお伝えしなければと思っていたんですよ。

　そもそも石村萬盛堂に勤めるきっかけは何だったんですか？

＜山田さん＞知り合いの方に「社長に会ってみないか」と言っていただいたのがきっかけです。その方に「あなたには商売が合っているよ」と言われたんです。老舗で、当時はお母様もいらっしゃって、厳しかったですよ。

＜校長＞最初から社長の秘書を務められたんですか？

＜山田さん＞後に人事担当の方からうかがったんですが、面接の時に社長が「この子を秘書に」と思われたそうなんです。でも、ちょうど経理の方が辞められたものですから、１年間ほど経理担当として勤めました。

　経理を１年勤めたころで社長が、「やはり秘書に」ということで異動しました。それから鍛えられましたよ。秘書として、総務として、引き続き経理についても。今のように大きくなる前でしたから、何でもしなきゃいけませんでしたね。

＜校長＞この道 32 年ですね。

＜山田さん＞32 年と１か月です。それはもう貴重でした。会えない方にお会いしたり、テレビで見る方たちに声をかけていただいたり、電話していただいたりと可愛がっていただきました。そんなことってめったにないじゃないですか。「社長は凄い」と思いましたよ。お付き合いされている方々が凄いなぁと思って。

＜校長＞私は山田さんと頻繁に連絡を取るわけではありませんが、会議などで社長に随行してある姿などを見ていて、社長の側に不可欠なあなたの存在が凄いなぁと思っていたんですよ。あなたの持っている存在力というか、力というか、あなたがいないと困られるんですよね。

＜山田さん＞社長に一つ一つこまごましたことをお伺いしていたら、社長の頭の中からそれが抜けない。それがいやだと思います。それを私のところで、だいたいこのようにしておけば大丈夫だろうとか、これは指示を受けてからだろうとか、優先順位を決めるなど、そのように対応して事後報告し、「それでよかった」と言っていただいていました。それでご自身は仕事に専念され、講演にも行ったりされるんですね。

＜校長＞ここだけの話ということで、遠慮せず、恥ずかしがらずに言っていただきたいんですが、社長の“外付けの大きな頭脳”として重く用いられたあなたにある力って、何だと思いますか？

＜**山田さん**＞えっ、何でしょうか。一つは、打たれ強いって言われましたね。反省はするけど打たれ強いって。「あっ、怒ってしまった」と思っても、また次に呼んだら「何ですか！」と明るくやって来る。しゅんとなると指導もしにくいと。

＜**校長**＞人間関係や仕事の調整などがあるから、その調整をきっちりとさばいてくれて、「そのとおりでいいよ」というほどのことをやってくれるという安心感などもありますよね。

＜**山田さん**＞「あんたが間違えば、私が間違う」と社長に言われるから、間違えないようにしておかないといけない。ああだ、こうだと横でおっしゃらないからこそ、まるで線路の上を歩いていただけるように段取りをしていました。社長と秘書との関係が長いからお互いにやりやすかたんでしょうね。

＜**校長**＞私もこれまでに学年主任など、学校の“ミニ・リーダー”みたいな立場を経験してきているんですが、自分が預かっている範囲がうまくいく時というのは、周りの先生方が提案をしてくれて、「あ、それいいですね。それでいきましょう！」という時はうまく回っているんですよね。リーダーとして“「よし、それでいこう！」と言う係”をしていられる時というのは、組織がうまく回っているんです。リーダー自身がああじゃないか、こうじゃないかとこまごまと考えている時というのは、あまりうまく回っていかない。

＜**山田さん**＞そうですよね。リーダーに迷いや不安があったらダメなんです。人が何と言おうと自分はこうであるというのがないと。

＜**校長**＞それを絶大なる信頼をもって任せられて、答えを受け取ったら、当然信頼できる答えだからそれでいこうと。やはり凄いですねぇ。そうだろうとは思っていたんですよね。そうじゃないと務まらないもの。社長と社員の方々の結び目にいて、社長にストレスがかからないようにさばいていたということですよね。たぶん山田さん、そういう仕事をしているんだろうなぁと思っていたんですけど、改めて聞くと凄いですね。

＜**山田さん**＞30 年間、人生つぎ込んだという感じですよ。だから、退社後はもう働かなくていいと思っていました。

＜**校長**＞社長が退かれて会長に就任され、社長が交代された。その後に退社されるという引き際も見事ですね。これまで 32 年間秘書として勤められたからこそできた技のように思いますね。山田さんが辞めること自体が大きな提案であるような気がするんですよね。

＜**山田さん**＞次にステップアップできたのも、萬盛堂があったからですよ。

＜**校長**＞３２年間萬盛堂で勤めてきたキャリアというか、石村社長の信任を得たというのが大きいですよね。多くの方々が社長と繋がられるんだけど、その中であなたを見てありますよね。だから、「次は久原本家に」と聞いた時に、さすがだと思いましたよ。

　ところで、３０数年萬盛堂の歩みを見てきて、企業が発展していく上で「なるほど」というところを見てこられたと思いますが、何かポイントのようなものを感じられていますか？

＜**山田さん**＞やはりベクトルというか、社長が指示したらそれにみんながついていく力が強いと発展もしていくと思いますね。商品開発など、時代に合っていたんじゃないでしょうか。新商品をつくるのに社員がいろいろな考えをもってきて、会議があって、「こうする」と社長が指示して決めて、みんなが賛同して乗っからないと、あっちこっち見ていてもうまくいきません。それがあの時代は、ピタッと合ったんだと思いますよ。随分伸びましたからね。

＜**校長**＞いい組織を社長がつくられていたということですね。長年勤める中で、あなたが身に付けた力、勤め人として必要な力、山門高校の後輩に「この力だけはいるよ」というアドバイスをいただきたいんですが。

＜**山田さん**＞そうですね、私は好奇心が旺盛でしたね。いろんな所に勉強に出させてもらうんですが、知らないことやわからないこともあります。やはり知らないと恥ずかしいし、知るためには習わないといけない。本当に一つ一つが人生勉強でしたね。社長から「ちょっと行ってきなさい」と言われてお手伝いに行くのでも、看板背負って行くことになります。会社内では間違っても許されますが、外で間違えると会社の信用にもかかわりますから。好奇心旺盛でしたね。お金もつぎ込んできましたね（笑）。

　それに加えて、プラス発想していかないといけないですね。

大丈夫だと思ったり、人から言われたことは素直に聞き入れるということを、社長がよく言われてましたね。何でも「はい」と受け入れて、変えていけばいいんですから。「そうじゃない」と思っても、「そうは思いません」と言うのではなくて、その時は素直に受け入れて、そして方法を変えていけばいい。「違う」と言ってしまうと、誰も教えたりしてくれなくなるんです。

　コミュニケーションもとっていかなきゃいけないですね。何でも口頭で。メールでは自分の思いが伝わらない。パソコンで送っておけばいい、送ったから証拠になるということではなく、「大事な時はメールではだめだ。直接電話しなさい」と言われていたんです。

＜**校長**＞話を聞いていますと、社長さんとのやり取りの中で得たこと、学んだことを一つ一つ自分の中に積み上げていって、今の山田さんがあるような気がするんです。好奇心というか、素直に受け入れていますよね。

＜**山田さん**＞初めの 10 年、15 年はずっと怒られてました。何もできなかったからですね。社長には「こうしなさい」という強さがありましたね。だから後半になると、私に任せてくださったと思うんです。

＜**校長**＞山門高校はこの２年ほど募集定員に 10 数名ほど届かないという状況にあるんですが、あの地域にあって母校の山門高校にはこうあってほしいというような願いなど、聞かせていただきたいんですが。

＜**山田さん**＞後輩に勧められる高校ですね。どこに進もうかと迷っている中学生に、「うちの学校に来なさい。行った方がいいよ、あそこだったらね。」というように、自分が勧められる高校であってほしいですね。

＜**校長**＞「山門はこうだから」という部分は、どんなところに感じたり、これからもっとこうなってほしいというところはいかがですか？

＜**山田さん**＞“井の中の蛙”になってはいけませんね。一例ですけど、土曜日・日曜日の模擬試験など、福岡まで出て行って受けて他校の生徒さんとふれ合うと、自分の実力がよくわかるんですよね。“井の中の蛙”にならずに外を見ると、同じトップでもレベルの違いがわかる。そうすると自分が磨かれていくじゃないですか。目標を持つということにもつながると思うんです。目標を高く持つと、志も高くなっていくと思いますよ。

＜**校長**＞山田さんの山門高校での３年間はどうでしたか？こんな学校だったというような山門高校のイメージはどうですか？

＜**山田さん**＞和気藹々でしたね。とにかく楽しかったですね。みんな仲良しでしたから。ですから、「福岡山門会」に出席しても、先輩、後輩の皆さんと楽しいですよ。

＜**校長**＞それは山門の変わらぬ伝統ですよね。今も仲良しで、明るい。社会に出ても先輩、後輩の関係に支えられるんですね。

　私の中には高校生時代の山田さんがいて、月に１回会うというわけでもないんですが、その山田さんがこれだけの力を持っているというのがわかっていたので、離れていても凄いなぁと思っていました。今、山門の校長を務めていて、今の生徒たちを見ていても、そういう先輩方につながっていける子たちを育てているという気持ちはあるんですよ。その先輩方が特別な方というのではなくて。

＜**山田さん**＞そう、その方たちだってここで学ばれたんですよということを伝えたいですね。

＜**校長**＞「好奇心を持って、“井の中の蛙”にならず、目標を持って、素直に受け入れて積み上げていく」ということですね。“井の中の蛙”にならず、外に出れば出るほど人と人の広がりができて、より大きなことができていくということですね。

＜**山田さん**＞そうですね。本当に単純だけど、それだけですよ。休みも少なく、人は休みも多くて海外旅行などという話も耳に入りましたが、私は一つ一つトップに「この日は休んでいいですか」と確認しなきゃいけませんし、お給料だってみんなの方がいいんだろうと思っていました。でもある時、後輩から「お金以外のものを得ているじゃないですか」と言われたことに、はっとさせられました。楽しい 30 年でしたよ。

＜**校長**＞気づいたら、人から求められる存在になっていて、今回の転職にしっかり生きたということですよね。今日、ばったり会えたことをとても嬉しく思います。山田さんが１両目、私が３両目に乗っていたら、全くこの時間はありませんでした。みっちり 50 分、いいインタビューができました。

環境が変わり、柳川市から天神を経由して糟屋郡久山町までの通勤ですから、くれぐれも健康には留意して活躍してくださいね。

・　・　・　・　・　・　・　・　・　・　・　・　・　・　・　・

＊“教え子”って、本当にありがたい存在です。教え子の記憶の中に「私の姿、像」（授業はわからんけど、やたらと元気！？）があって、それを壊さないように、その一心で教師を続けてきました(^_^)v